

がむしろ具体的な保育知識の有無が問題だと指摘した。発表者は保育場面を設定し行動態度を分析していると答えたが、これに関連し駒崎(前出)は人格検査はむしろ根源的な保育適性の可能性を見出す方法ではないかと発言、桜田(前出)も同様な意見を述べたあと教師の経験年数と人間関係の円満さとは必ずしも一致しないなど感想が述べられた。なお原野の発表は極めて重要課題でありながら質問がほとんどないのは残念であった。全体として討議は活発特に発表者同士の討議が多いことは雰囲気気を盛りあげ印象的であった。(駒崎勉・後藤嘉余子)

座長 津守 真・荒木 紀幸

- 361 菱形模写における具体的操作と言語的説明の効果について 村越 洋子(新宿区教育センター)
- 362 描画活動に及ぼす認知的要因の効果 川床 靖子(東北大学)
- 363 「家」の描画の発達的研究
 - 描画による精神発達の研究(4)—
 - 津守 真(お茶の水女子大)
- 364 幼児期に於ける側面優位性の発達的研究
 - 使用手としての利き手の発達について—
 - 三島 二郎(早稲田大学)
 - 守屋 国光(")
- 365 造形能力の発達—マッチ棒による造形— 荒木 紀幸(宮崎大学)
- 366 幼児の創性成に関する研究
 - (1)その規定因の分析—
 - 長谷川 浩一(芦ヶ崎恵泉学園教育研究所)
 - 阿部 智江(")
 - 堀内 すみ(")
 - 雲 英春(")
- 367 第二信号系獲得期に於ける手を中心とした発達連関の研究 その1
 - 寺田 ひろ子(京都大学)
 - 幡 磨 俊子(")

I 全体的特徴

図形模写描、画などに関する研究が、本部会の研究発表に共通にふくまれていた内容である。

361 村越による菱形模写の研究では、幼児の実験教育における教育効果が強調して発表され、362 川床の研究も、描画を認知の側面から研究したものであった。365 荒木の研究は描画ではなく、マッチ棒による造形の研究である。363 津守の研究は、自発的描画の縦断研究であり、366 阿部の研究は、創造性全般を課題としたものであった。また、367 寺田の研究は、全般的行動を課題と

したものであった。

II 討論の内容

村越の菱形模写の研究と、津守の描画の研究とは、討論の中心となつたように思う。幼児の描く図形は、幼児にとってどのような意味をもつものであるか、幾何学図形の模写能力は、訓練によって向上するものであるか、それはどのような教育的意義をもつものか、など、討論活が活発に行なわれた。

討論時間終了の後、津守の研究発表でスライド呈示ができなかったため、スライドの呈示がなされ、有志の人が残って若干の討議が行なわれた。

全発表者について均等に討論が行なわれなかったことは残念であった。(津守 真・荒木紀幸)

座長 藤野 武・古沢 頼雄

- 368 愛情の学習 藤野 武(北海道教育大学)
- 369・370 3才児における性意識および性役割行動の研究
 - 1 問題・方法— —2 結果・考察—
 - 依田 新(日本女子大学)
 - 宇川 和子(")
 - 宮本 美沙子(")
 - 古沢 頼雄(")
 - 天岩 静子(")
 - 武 安 美智子(")
- 371・372 幼児理解の一方法としての観察法の研究
 - 牛山 聡子(東京教育大学)
 - 牛島 理ぐみ(")
 - 氏森 純子(")
 - 江口 純代(")
 - 高橋 道子(")
 - 小林 邦雄(")
 - 早 岡 洋子(")
 - 川 紹 子代(")

I 全体的特徴

個人発表1題(362)、共同研究発表2題(369・370、371・372)が愛情の学習機序に関するもの、性役割・性意識に関するもの、観察法に関するものとそれぞれが独立した内容をもつもので、とくに共通した特徴づけを行なうことは困難である。

藤野(368)の研究は、愛情という複雑な心情傾向を操作的に規定し、「社会的モデルによつてひきおこされる効果を、病犬に対するみつめた時間とさわった時間によってとらえようとした。VTRによって示されたモデルの行動を見た実験群の幼児は、見ない対象群よりも、より多く病犬に対する「あわれみ」つまり、犬を「愛した」というものである。

古沢・天岩ほか(369、370)の研究は、3才児について性意識及び性役割行動が相互にどのような関連性をもつかについて検討したもので、同一幼児について従来用